

---

# みなみけと南君

ちか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みなみけと南君

### 【著者名】

ちか

### 【あらすじ】

春香たちの南家と、ある高校生の出会い。これがきっかけで南家と大きく関わることになる高校生の話。作者は春香スキーなので、春香に偏ってしまうかもしれません（焦）また、本作品は恋愛小説をイメージしていますww

## 1章 出会い（前書き）

初めての投稿になりますー。いたらない点もあると思いますが、頑張る所存です！

## 1章 出会い

（朝）

4月。そう、今日から新学期。

休むわけにもいかないので、学校に行かなくてはならない。

「うへ～、ダルいお」

俺が声を発しても返事はない。

それもそのはず、現在、俺の両親は仕事で海外、姉は遠くの大学に通つてるからその近くに住んでいる。

「別に寂しくはないけどな。さあ、学校に行くか」

俺が出かけようとして時計を見ると冷や汗が大量にでてきた。

「遅刻ギリギリやん！」

急いで自転車で学校に向かつた俺は、秘密のルートを通ることになった。

「急がないと～！ やばしやばし！」

顔を下に向け、思いつきりペダルを踏む！

当然、自転車は早く進むが俺は前を見ていなかつた。気付くと、目の前にロングヘアの女子生徒が視界に現れた。「どいてくれええ

！」 「えつ？」

俺は出来るだけブレーキをかけながら叫んだが、その女子生徒にぶつかつてしまつた。

「すすすすいません！ 大丈夫ですか？」

まずいぞ！ 女子を引いちまうなんて俺の紳士としての心が痛みなが

らも必死に言葉を発する。

「ええ何とか。あなたこそ大丈夫？怪我はない？」

マジか。引いた俺を攻めないで逆に心配までしてくれたなんて、まるでお母さんの様な暖かさを感じてしまったよ俺。

「はつはい！本当にすいませんでした」

「うん！今度からは気をつけてね？あつ早くしないと遅刻しちゃう！それじゃあね」

そう立ち去る彼女を見てこんな事を思つてしまつた。

「これなんてギャルゲ？」

その場で突つ立つてたこの後、たつそく遅刻してしまつたのは言つまでもない。

## 1章 出会い（後書き）

文才が無いのは百も承知でしたが、何とか書く事が出来ました！  
もし、よろしければ読んだ感想をお聞きしたいです。更新はなるべくするつもりなので頑張ります！今回主人公の名前まだでねえw

## 2章 保坂現る（前書き）

まだ春香が全然出てこない（焦） 今回はあるの気持ち悪い奴が登場しますww

過度な期待はしちゃいかんwww 次こそ春香出します！

## 2章 保坂現る

（教室）

「一年になつて初っ端から遅刻を決めるとはさすが南だなー。」

こんな風に朝からさわやかスマイルで話しかけてくるのは、同じクラスメイトのたしか名前は……

そういうや名前知らねえ（焦）去年からあだ名で呼んでたしな。

こいつはAと呼ばれていたな。うん。名前の頭文字がAらしいwww  
つかA<sup>ア</sup>って「あ」じゃねえか！名字くらい読んあげようよ贋……

暇なので、このままAと話す事にした。

「なあA<sup>ア</sup>、俺、登校中に天使を見かけたんだー！ロングヘアーデザイナーでも、何処かで見たことがあるような気がするんだ」

「ロングヘアーデ天使？この高校でそれが当てはまるのは同学年の  
南 春香さんじやないか？」

「南 春香？そういうや聞いたことあるな。でも、もつと間近に見た  
気がするんだよなあ」

「いやいやお前はバレー部で見たことあるだろ？たまに速水先輩  
とかが連れてきてたぜ？お前女子きちんと見ろってー！」

「どうか、あの人南 春香さんか！つか同学年じゃねえか！年上か  
と思ってたよ（焦）。俺としたことがバレーだけに集中しそぎてた  
な。

南といつ名字が一緒だったから気にはなつてたんだが、うかつだつ

たお。

「南ー。そろそろ時間だから集会行こひづぜー。」

「はいはい、かつたるいな～」

その後、集会で春香ちゃん…いや、馴れ馴れしいな。ややこしいが、南さんとお呼びしよう。の姿を見つけたときは、先生の話がまったく耳に入らないほど集中して見入っていたのは眞には秘密だ。

集会も終わり、今日は授業もないのに部活に行こうとしたその時、あの人気が現れてしまった。

「涼！ 今日こそ南 春香を我が男子バレー部の専属マネージャーに迎え入れに行くぞ！」

クラスの皆は静まってしまった。それもそのはず、眞は「涼」と言う名前に聞き覚えがないのだ。

俺のことを南以外の呼び方をする奴がないので、必然的に俺は「南」と言つ名前で固定されてしまっている。これを機会に覚えてほしいものだ。

「はい！俺専属のマネージャーにします！」

「いいからダメじゃないか涼。後で特訓してやるわ。」

「すんません。冗談です保坂先輩」

「ならいい。では、体育館で待っている！その間に南 春香を呼び出しちゃう。あは！あはは！あはははははは！」

やつと去ったか。なんか妄想してにやけてたけど…

今のは、三年の保坂先輩。バレー部の部長だ！バレーも上手いし、顔もいい。ここまで俺も尊敬してるんだが、何だか気持ち悪い。しかし、嫌いな訳ではないんだよ？複雑な心境だな。これがアツコの気持ちなのかな。

とりあえずナツキ探して部活行くかな。

## 2章 保坂現る（後書き）

すいません。春香は次の話で登場させたいと思います！今回は保坂で我慢して下さいね。文才なくてすいません。感想待っています

### 3章 南つてあの南だったのか…（前書き）

何とか3話目です。そろそろ主人公の紹介しないとマズイかなあ。  
あと、全然春香らしからぬ感じかもしれないで注意！

### 3章 南つてあの南だったのか！！

俺は、とある一年の教室に顔を覗かせる。

「よつナツキ！」

「あつ、南先輩。ウス」

「今日は練習来れるのか？」

「……スンマセン。飯作んないといけないんで」

「そつか…また保坂先輩が暴走してるから止めるの伝つてもうらうと思つたんだがな」

「またツスか？正直、俺には保坂先輩を止められないツス。でも、南先輩なら止められるかもしれないツス」

「そつか？まあ、こつしてる間にも体育館がどうなつているか分からんからな。そろそろ行くわ。じやあな」

「健闘を祈るツス」

ナツキが来れないのはキツイな。保坂先輩のストップパーが俺しかいなくなつちゃうじやん！

そういうや、速水先輩のストップパーも俺なのか？

鬱だあああ～～～～～！

そんなこんなで、着替えて体育館に着いた俺はその場で立ちぬくしてしまった。

そこで見たのは、見事なスパイクを決める南 春香の姿だった。

「はあああ～～！」

勢いのあるボールはそのままアツマの手をはじき、ヒヤヒヤ飛んできた。

「えつ？」

そんな間抜けな声を出しながら俺に見えたのは、ヤバい…という表情の南 春香と速水先輩のにやけ顔。そして、保坂先輩の悔しがる姿…また脱いでるよ…。

バチンッ！！とまるでビンタされたかの様な痛みとともに、ボールが俺の顔面にヒット！

意識はシャットダウンした。

気付くと俺は保健室で寝ていた。なにかが俺の顔面にぶつかった様な気が…そうか！ボールだ！  
ボールが俺の顔面に当たつてそれで…

「あれ～南つち起きた～？このまま保坂みたいに起きなければいいのに～～あはは～冗談だつて！そんな顔しないの～！」

「冗談に聞こえないです（泣）つか、保坂先輩に何したんですか（笑）」

「俺にも当たるって気持ち悪かつたからつい、見事なスパイクを決めてしまったわ（笑）」

「速水先輩です。でも何で速水先輩がここに？』

「あ～用があるのは私じゃないんだ～。んじゃ、突然ですがゲストをお呼びします！どうぞ～！！！」

そう言うと同時に、速水先輩はダッシュで保健室を出て行つた。凄くニヤニヤしてたけど、あれは何なのさ！怖っ！！

そんな速水先輩と入れ変わつて、一人の女子が入ってきた。

「えと……大丈夫だつた？」

南さん？ああ、南さんのスパイクが当たつたんだつた。記憶が曖昧  
3?だな。

今のは気にしなくていいよ（笑）

「この通りピンピンしてるよー心配するほどでもないＺＥー・  
強気な俺

「さつき氣絶してたじやない」

痛い所を突くなあ。しかし、思った事をズバリ言つね。  
ズバリ言つわよつてか？ははっ！

「そうだったね。でも、南さんってバレー上手いんだね！スパイクの時なんて見入っちゃったよー。」

「えつあ……ありがとー。」

あれ？ 南さん赤くなってるけど…。夕焼けだからか？

「バレー部入ればいいのに…今ならギューラー取れるつて…マキとかも誘ってくれてるんだろ？」

「そうなんだけど…家に子供たちがいるから…」

え？ 南ってそんなD・A・I・T・A・Nのか…？  
いや、そんな馬鹿な…こには聞くしかないか…！

「みつ南って子供がいるの？」言つたー…言つてしまつたー…（焦）  
「ややややや…じくじくめんなさい…!!!!!!いい妹が2人いるから…。」

最初からそう言つてよー。焦つたよ俺。

「そうかそうか！早とちりしきやつたな。そういうや、自己紹介がまだだつたね。俺は…」

「涼君でしょ？」

「えつ？」

いきなり言わされたので、少し驚いてしまつた。

しかも下の名前で呼ばれるのって新鮮だなあ。病みつきになつそうだ。

でも、何だらう。懐かしい感じがする。

「南 涼。高校2年でバレー部所属。勉強は中の上、バレーは保坂先輩に次ぐエース。でしょ？」

「南さんがなんで俺の事を????????」

「マキが毎回話してるから……あいつは保坂先輩の弟子だ～～って

アイツソンナコトヲオモツテタノカ。  
ちょっと怒りがこみ上げてきましたよ私。

今度アイツが保坂先輩の彼女候補といつ情報を流してやる（笑）

「てゆうかまだ気付かないの？」

「何が??？」

「私を見て何も思い出せない？例えば、中学1年の時とか

「うへん。中学中学??」

「南さんは、俺に向を思い出せと??中学1年といえば、それなりに楽しかった気が。

バレーやって、遊んで、やういや、やけに仲のいい女子がいたな。たしか名前は…南。

「そつか～覚えてないか～。そつだよね。中学2年の時転校とかあつたしね。」

「今、何と言つた?? 転校? 何故、俺が中2の時に転校したの知つてるんだ? 同じ中学か? 南? 仲のいい女子? ま・さ・か・な。でも、聞かなきゃ分からなーいし… ょしッ!!

「もしかして中学の時に一緒にクラスだった南か?」

自信は無かつたが、彼女の何となく寂しそうな顔を見たら聞かずにはいられなかつた。

「(1)名答ー涼君久しづり!

パツと笑顔がはじける。

「ええつ! まったく気付かなかつたよ! まさか、同じ学校に一年もいて気付かないとはね。申し訳ナッシング」

「私も気付いたのは今日なの! 自転車でぶつかつたじゃない? あの後、なんか顔に見覚えがあるなあって。で、さつき体育館で気絶した涼君を見て確信したわ! なんで今まで気付かなかつたのかしら? マキから聞いてたはずなのに」

「俺、中学の時は南としか呼んでなかつたから下の名前を忘れてたよ。つか、今までバレーヤりに来てたんだろ? 練習に夢中で南がい

たのもわからなかつたわ。すまん！」

「ここだけの話、南の見た目がグッと大人っぽくなつていて、さらには気付きにくかつたというのは、南には内緒だ。

「お互い凄く近いのにすれ違つてたみたいね。でも、これからは、また話せるね！」

あれ？何か凄く恥ずかしいぞ！中学の時はなんともなかつたのに…おかしいなあ俺。

「そつそつだな！てか、こんな時間だし、部活は…今日はいいや。帰るか！」

時刻は17：00時。丁度夕焼けだし、それに…南と帰りたいしな。べつ別に変な意味ではないぞ！？久しぶりだからいろいろ話したいだけだ！！

「俺高校に入つてからまた、中学の時住んでた場所に戻つたんだ！便利がいいしな。だが、両親とかいないから飯がめんどいな。ああ変な意味じやないぞ？仕事で海外にいるんだ。そういうや、南つて中学の時自炊してたって言つてたよな？今でもか？」

「まあね…涼君は自炊してるの？」

「断食…ときどきカツラーメンかな…！」

俺は自信満々に言つてやつた。金があまりない俺は、昼飯だけ断食をして食費を浮かしているのさー朝は適当、夜はカツラーメンのサイクルなのでそろそろ飽きが出てきた今日この頃。

詳しく述べる。震つたが、南が震えてる。どう

したんだろう。  
寒いのかな？

などと見当違いの事を考えていいの俺は、この後起じぬ出来事をまつ

たく予想できなかつた。

「いいかげんにしなさ～～～い！～！」

「すすすすすす、ません！」

とりあえず謝るが、効果は無いようだ。

「私そりやうの凄くイライラするの！食生活は生活の基本よー！」

「……………」

恩！

返事しかできねえや。でも、今日の朝と同様、お母さんみたいだなあ。

「京君聞いてる！？」

「もちろんありますよ……南殿！」

「ならないわ！だから……そんな食生活を直すために……今日私の家で……」

「家で...?」

北猿の特徴が！「そんなのは御免だ！！」今の薛は、シ恐しそうに逃げる

心中でクラウチング・スタートの構えをとる俺は、それほど恐怖を感じていた。

「私の家で……」

「家で……？」「へへ……

「『』飯…食べていかな…い？」

完全につつむきながら呟つ彼女。わずかに見える頬は、やはり赤く見える。

マジか。

俺は馬鹿だな。地獄の特訓とか考えていた自分が恥ずかしいな。

久しぶりに会つたばかりの俺の心配とは嬉しいぜ！おい！

だから俺は

「『』んな俺でいいなら、是非食べさせてくれよ……！」

「じゅあ…いこつか！」

そつまつてはにかんだ南さんは本当に美人だと思つた。

つて待て！！若い女の子の家で『』飯つていいのか！？？

それに、南には妹がいたような……

えええい！！男は度胸だ！！

待つてろよみなみけ！！

### 3章　南ひてあの座だつたのか…（後書き）

なんか凄く書きました。中学の時の涼と春香は、異常に仲が良かつたという設定で書いてます！思いつきでポンポン書いたので、いたらない点ばかりとは思いますが、暖かく見守ってほしいです。感想まっています…！

#### 4章 みなみナ三姉妹（前書き）

遅くなりました！…やつと4話です！またまた長くなりましたが、  
読んでもらえたらありがたいです。あと、南家のビルの描画はして  
ません！

## 4章 みなみけ三姉妹

着いちやつたよ……

田の前には「南」の表札。もづ引き返せない状況になっていた。

「じうぞ上がつて！」

南に誘われるがままに、部屋に入る俺。

部屋は綺麗に片付いており、彼女の几帳面差が分かる。

やつぱ女の子の部屋だなあと実感する。  
いや、部屋というか家か。

南の両親は仕事の都合上一緒に住んでないのは中学の時に聞いていたけど、よくこんなにまともな生活ができるな。俺も部屋掃除から始めてみるか！

「すぐ作るから待つてね！……」

南はそう言つと、キッチンに入つて行った。

そんな貴重なエプロン姿の南を、俺は見逃さない！！

エプロン姿いいな。あいつ何着ても似合いそうだし……むつふつふ

(企)

でも、何か忘れているような気が？

……………

！――！そだ！南の妹だ！

妹がいるのは知っていたが、この状況を見られるのは気がまずい！  
ああ、来る前に決意したはずなのに……

まさか部屋で静かにしているのか？それか気を利かせてているのか？  
そう信じるしかないか…。

それにして眠い。何か知らんが眠い。でも南の「」飯が出来るまで我慢が…まん。

だが、俺の思いもむなしく、座つたまま寝オチしていく。

「ただいま～！～ご飯はまだか～！～」

「……おまえはつるさいんだバカ野郎」

ん……たしかにうるさいなあ……何だよ……

「どうしたバカ野郎？……誰だこいつは？」

随分な言い様じやないか。南らしからぬ言葉使いだし。

「寝てるな… よく見ると虫々の顔しててるし！春香～！—男連れ込んだのか～～？」

ガツシャ～～ン！！！！！！

キッキンで大きな音が。だから、うるさいってばもー。

「春香姉さまがそんな事をする訳ないだろ。」こつはただの不審者だ

「なるほどー。じゃあ、Jの夏奈様が懲らしみでやねー。一まずは落書きからだな」

「そう言いながらマジックを近づけてくる奴。顔面まであと数cmの所で俺は目を見開いた！！」

うん。アホだつたんです俺。まさか、あんなことになるとは。

ツインテールのうつさい奴のマジックが俺の目になりそうだ。

そこにやつと救世主が

「二人ともうるさい……！」

叱られました…グスン…泣きそうだ。目が痛いからな。ガチで。

つづくまる俺。

「一人ともなにやつてるのよ！？」

「不審者がいたから撃退しようとした」

「バカ野郎がここにも……」

「悪いが、俺は不審者じゃないよ！南の同級生の南涼だ！」

う。だから血口綻介の俺はさぞかし気持ち悪いことだろ

マキが見たら「気持ち悪い」と一刀両断されるな。

これが、俺とみなみだけ次女と三女とのファーストコンタクトとなつてしまつた。

食卓

「やつ きは「めん」「めん!」不審者かと思つちやつてさー私は南家  
次女の夏奈様だ! よろしくな涼!」

「様つておいおい……ん? 涼……?」

「自己紹介してたろ?、名字が一緒に涼って呼ぶから覚悟しろ！」

そういう言ひ方アインティング・ホースをとる夏奈 訝れからんか面白

「ああーなるほどねー。みんなへんなもんやね、今まで浮ばれたことないからまだ慣れつつにならう。

二三

「とにかくで…あっちで僕を見つめてるのは？」

「あの子は」女のか秋よ。ほらー、うちのお兄ちゃん」挨拶ー。」南がそつまつと千秋…ちゃんとせ」むりに歩こしてくる。

一  
南  
千秋です。：ハ力野郎

この子には、俺はバカ野郎に見えているのか?」「な、た…」

一 バカで何が悪い！！バカと天才は紙一重なんだ世！？」

お前はバカだけとな

涼君もバカな」としてないで……千秋も謝りなさい?」

「じめんなさい」

南の言うことには従順なのな。お兄さん少し悲しい。グスン…

「どうして、お母さんは家にきた訳？」

夏奈の質問は当然だな。なので、俺はこれまでの経緯を話した。

「へえなるほどねえ。春香も大胆になつたもんだよ」

「ヤーヤしながら歯を見る夏奈。」「ヤーヤしちゃだー。変顔になつてるや。

「べつ別にご飯だけじゃない！そういうのじゃないわよー。」あきらかに動搖しないか？どうしたんだろ？

「普通は連れてこないだろ？くくくつ涼！春香を頼むぞ！」

あきらかに楽しんでるや」「イツ? まさか俺を何かと勘違いしてんな。  
よし! -

「夏奈ちゃんそれは違うな！俺はただの学生で、南家には飯をたかりに来たのだよ！……！」

ジョジョ立ちという、奇妙なポーズをとりながら言い切つた！

「キモツ」

「バ力野郎

妻の反応

凄い反応だ！しかし、ひどすぎる！ウケ狙いなのにまったくウケない。ジョジョ見ろよ〜。

「今更に楽しんで酔っ払ってる内に、食事は終わっていた。

「いや～～いろいろどپ♪めんな両」

「ううん。いいのよ。妹達も涼君気に入ってるみたいだから」

「それにしても個性のある妹さん達だったね」

「そりか？私も男の子を家に上げるのは初めてだったから、妹達が驚かないか心配だったわ」

「最後らへんはオカズを奪い合ってたけどな」

「あの子達のあんなに楽しそうな顔は久しぶりに見たわね。ところで、もう帰るの？」

「やうだな、そろそろか……」

「春香姉さま！」

俺の言葉を遮りて、千秋ちゃんがリビングにやつてきた。話を聞くと、算数で分からぬ問題があるらしい。

「困ったわねえ、私も分からぬわ。」めんね

南も舌を巻く問題らしい。ここは俺の出番かー

「俺で良ければ教えるよ?」

「良かつたじやない！千秋教えてもらひなさいー！」  
南は皿洗いをして、キッチンへいってしまった。

「…………」

気まずい…。千秋ちゃんも南以外に聞くのは中々ないのが、少し警戒されてる気がする。

「こは腕の見せ所だな！

「問題を見せてじらん？」

千秋ちゃんは諦めたのか、渋々問題集を差し出す。

うおっ！確かに難しい！小学生の問題なのか？ってよく見たり○○

大付属の過去門じゃないか！

これは千秋ちゃんも悩む訳だ。

だが、甘い！

「いいかい？千秋ちゃん。これはね…………」

俺は丁寧に教えていく。その甲斐あって、次の問題は自力で解けた。

「お～～」

シンプルな反応の千秋ちゃん。しかし、俺も問題解けて良かつたあ  
あ。一安心だ。

「リョーはバカ野郎だが、頭はいいんだな。夏奈とは大違いだ

「やうか？ははつ、今なら俺をお兄ちゃんと呼んでいいぜ！」

「…………」

完全にしらけた。ヤバイ！調子に乗ってしまった。高感度ガタ落ち  
かこひの野郎。

「…………こい」

「えつ？」

「リョー兄

ぐはああああああ！コイツあ半端ない！俺おかしくなつそつ。  
妹さんつて素敵だねははつ

「いや、やつぱりローでいい。俺が耐えられん」

口リだと思われちゃうからな！俺が言い出したのに無責任だよ俺。

「ロー。じつとしてる」

「ん？」

すると、千秋ちゃんは俺の股の間にちょこんと座った。頭が俺の胸  
に一度当たるくらいなので、寄りかかってきた。

「ここは千秋ちゃんの特等席だな。ここで勉強するのかい？」

「兄と呼ばないから我慢しろ……バカ野郎」

「はいはー

この後、勉強は1時間ほど続いた。

「思わず漫画を読みふけってしまったよ～牛乳～」

ヅカヅカ入つてくる夏奈。

「しーーー！」

「春香へどうしたんだ？」

「あれを見て…」

春香が指を指した方を見ると、テーブルで勉強していたのか、千秋が涼の股の間に入つてよつかかるようにして寝ている。涼も座つたまま寝ている。さつきも寝てなかつたつけ？

「な～んか兄弟みたいだな」

「そう？私は父娘に見えるけどなあ。名字が一緒だと親近感沸くわね」

「それは春香が母さんなのか？大胆だねえ」  
再びニヤニヤする夏奈。

「あ～～そうじゃないって…！もう～」

(今日の春香はからかい甲斐があつて面白い…＼＼＼＼＼)

「んん…」

「おつ」

「ああ寝てたか。すまんな。そろそろ時間だし帰るか」

「つゝー…」

「～～～めた、來い」

「…………めた、來い」

そう言つと同時に、再び爆睡。

「あらあら千秋つたら。ふふつ、涼君と千秋の寝てる姿が父娘みた  
いだつたわよ」

「おいおい、俺はまだ17だよ。そしたら母さんは南だな！」

一  
な  
つ

真っ赤になる南。 そうしたんだ? 何か悪いこと言つたか? ..... あ  
そーゆうことか。 ヤベッ、俺も恥ずかしいぞ。

一人して田を含わせられない。すげえ気まずいよ〜

「おー人さんよ、外でイチャついてきなさいよ！」

「イチヤついてないーー！」

声のタイミングもぴったり合ってしまう。今は変なことは喋らない方がよさそうだ。

「じゃあ帰るな。南、飯ありがとうー。美味かつたよー。」

「ありがとう！また来週学校でね！」

「また来いよ～春香の婿にな！」

「へへへ変なこと言わないのーー。」

「あ痛ああーー！」

夏奈ちゃんには、これからもからかわれそうだな。俺のピュアハー  
トが……

ふああ。しかし、まだ眠いなあ。早く帰つて寝るか。  
……また誘つてくれるといいな。

#### 4章 みなみけ三姉妹（後書き）

思いつきで書きなぐっています！なので、変な感じに思えるかもしれません。最後は千秋を結構書いてみました！次は夏奈かな？感想お待ちしています！！

## 5章 アツ！」も出かけ その1（前書き）

実は僕、アツ！」もお気に入りだつたりしますーー書きたかつたんで  
す。キャラ崩壊の可能性があるので注意！アツ！」の株が上昇する事  
を願います！

# 5章 アシ「」とお出かけ その1

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ପରିଚୟ

まつたく今日は休日だといふのだが、田舎まじのせいで早く起きた。

なんてこゝたい（泣）忘れてたよ～！

昨日は南の家でいろいろあつたからなあ、  
今日はのんびりと過ごしますかね。

30 分經過

これは町に繰り出すしかなくね？古本屋で立ち読みでもしますかね。

「 とお~事でござ歸せ……わたくしへ行くか。」

一人ではしゃいでて恥ずかしく思つたが、気にならぬ方金で行つて

町

さあて町に着いた訳だが……時刻はまだ9時、古本屋は10時開店

だ

そういうや朝飯がまだだつたな。朝マックでもするか！！

注文したエッグマフィンを持つて席へ。いざ、試食…！

……エッグマフィン美味し！なんかこの感じ好きよ俺。

飯も食べたし、マックから出ることにした

すると、目の前で女の子が上半身裸の男に絡まれていた。

「さあさあー南 春香の居場所を吐くのだ！！今日こそ南 春香の家に侵入し、アハハ！アハハ！アハハハ！」

「保坂先輩…………全開ですよ」

「俺の南 春香に対する気持ちは常に全開なのだ！！すべては愛のタ～メリック！！ハラハ～ラハラペ～一三～！」

「保坂先輩…………本当に全開ですよ…」

完全にアツコと保坂先輩じゃん！つか保坂先輩の事を通行人が見まくってるじゃないの…！

これはアツコも田立っちゃうな。仕方ない。助けてやるか。

「あはよつ」やつます…！…保坂先輩…」

「ん？涼じやないか。どうしたんだ？一緒に歌うか？」

「歌いませんよ…それより、話をチラッと聞いたんですけど、南の家はここですよ」

俺は親切にも速水先輩の家の地図を書いた。なんで知ってるかは秘

密だ！！

「さすが涼だ！感謝するー今度パスタの作り方を教えてやろー」

「遠慮しとくッス！自分で飯派なんで」

「そうか…それでは今度、特製保坂弁当の試食をさせてやろうーアハハハ！」

そう言い残し、保坂先輩は走り去った。つてか何でカレーの歌を歌つてたんだろ？まいつか。

「大丈夫だったかアツコ？」

「うつうん。なんとか…ね。ありがとう涼君」

「まさか女子の前でしかも、通行人が見てる中で脱ぐなんて危ない人だなあ。前から思つてたけど、ありや逮捕される日も遠くないな」

「私も驚いちゃつて、服の事しか指摘できなかつたの」

「確かにアツコは恥ずかしがり屋だからなあ。俺が来なかつたらとんだ羞恥プレイだな！」

「今日はマキがいないから、辛かつたよ」  
少し頬が赤くなつっている。相当恥ずかしかつたんだな。俺は無意識の内にアツコの頭を撫でていた。

「んつ」

「ああ悪いーつい手が…な」

「ううん、全然悪くないよ？ちょっと恥ずかしいけど……」

「ならしいんだが、つか今日は何か用があるのか？」

「今日はスポーツショップで、バレーのシューズを買いにきたの。前のがボロボロで使えなくなっちゃったから」

「アツコは練習頑張つてたもんな！速水先輩も期待してたゾー！」アツコがいつも朝早くから練習に来てるのを俺は知っていた。たまに男バレの用具の準備とかもしてくれた事もあつたしな。男バレ代表として何かした方がいいのかな？

「へへ～で、どんなシューズにするんだ？」

「それはまだ決めてないの。今日たまたまスポーツ用品が半額だから行こうと思つて」

なんだつて！？聞いてないぞい！！俺も練習着とか買いたかったんだよ～

「なら俺も一緒に行つていいか？買いたい物もあるし！そんでシューズマニアのこの俺がアツコにピッタリなのを選んでやんよー！」

「えつ…………うん。行こ」

「おつー！」

## 5章 アップデート出かけ やのー（後書き）

駄作でございません。本当は一話でもとめようとしたのですが、いかんせん現在深夜？四時なんで眠いです。中途半端でごめんなさい。できるだけ早く更新するつもりですーーんで感想お待ちしています。

## 6章 アツコの出かけ やの2（前書き）

久しぶりの投稿となります！何だか変な感じになつていてるかも知れません！

アツコもキャラ崩壊かもwww至らない点も多いですが、見守つていただけだと嬉しいです。感想も凄くほしいので、暇だつたら書いてもらえると幸いです！  
ではじりや～～！！！！

## 6章 アツコと出かけ やの2

「…………」

なんだか今日のアツコは口数が少ないな。なので俺から話題を振ることにした。

「今日はマキと一緒にじゃないのか？」

「えつうん。マキは春香の家に遊びに行ってるの。

「ほお……で、アツコは買い物を選んだ訳かー。っこにマキとの縁も切れたんだね」

「大袈裟だよ。私も買い物が終わってから春香の家に行くよ。」

「なるほどー。今度は俺を一人ににさせるのか。アツコは悪女だな」

「なつ…………何でやん」

そんなこんなで最近アツコをしてくれるアツコと話していく内に、スポーツショップに到着した。

店内は広々としており、いろいろなスポーツのコーナーに分かれている。もちろん俺たちはバーのコーナーへ向かう。

「シユーズだけ買つのか？」

「うそ。練習着とかは使えるからね。節約しないと」

「ふーん…アシㇼはケチでもあつたんだな！」

「私の金銭感覚がおかしいのかなあ？」

「うひーいつ真剣に考えてやがるー。そひせわひを言つた「何でやねんで返すところだろが！」

そんな天然つぱりだからマキヒトニハメウラレハマツんだな。納得。

「ビツビツか…したの？」

「ブツブツ言つてたら底じこと思われたよつだ。何かイワソロホー。(言わなこと)

「わあー…シユーズを見よつジャマイカ(じゅなこか)ーーー！」

「涼君つて保坂先輩と似て……」

「似てないー俺は否定するぜーあの姉さんみたいに否定するぜーーー！」

「何言つてるのかわからなこよー…………ヒツヤツてシッ！」おば……

「すまん。ボケ過ぎたわお前の反応が面白くてついつい……」

「 もう……早く靴見よ？」

「 アイアイサー！」

そろそろアツコもシユーズを見たいようだな。俺もウェアとか見ようかな。ってかアツコにお勧めのシユーズを選ばなくては！

（10分後）

田の前には『一撃必殺』とプリントされたTシャツ。  
なんだこれはっ！一撃で黙らせる程のスパイクが打てそうな気がするぞ！

これ買っちゃおうかな～どうじょつかな～。あつ！…あのウェアも格好いいなあ！

これ着たら俺も女子にモテモテになつて南が嫉妬し……

「涼君？なんか悩んでる姿が保坂先輩に似て……」

「それだけは認めねえええええええええええええ！」  
ビクッ！

どうやら、急な大声にアツコは驚いてしまった様子。  
女子にしては身長のあるアツコが怯えているのにはグッときてしまつた！

だつてそうだろ？こんな状況で萌えない男はいないだろよーむしろ萌えなきゃ失礼に値するだろ！

「 あすまん。保坂先輩の生き写しと言われたから、黙つてられなかつたわ」

「セレニティ…ないよ」

「わかつてゐや。今のもボケだからな」「キメ顔で言ひ放つ（何をキメるかは？」想像にお任せします）

「も…」

「うわらアツコは俺のボケの頻度に呆れてるみたいだ……これからは自重するか。

つてか田を合わせてくれないのは何故？アツコに嫌われたら俺はもう生きていけないな。

そうだ！シユーズ選び忘れてたのか。よしつ

「すまん！今からシユーズ選……」

「選んだよ

「はい？

「選んじゃったのかー？」

「うふ。涼君がウホアで悩んでるからお邪魔かなあと思つて

ついに見せ場も失ったか…俺が来た意味ないじやん。何してんだ俺…アツコへの恩が返せないじやないのさ。

「本当にじめんな。シユーズ選びを手伝おうと思つたんだが」

「いいの。涼君はいるだけで面白いから。でも……涼君はどんなシユーズを選んでくれるのか気になるなあ」

「よしつー実はこれなんか似合つんじやないかと思つんだ。」このメー カーはやっぱ……」

その後も「俺のお勧めスポーツ用品」の話は続き、アツコは「へへ」「ほ」と相槌を打つてくれたので話がしやすかつた。こんな気配りがやっぱ大事だよね？

話も終わり、帰る雰囲気を醸し出すとアツコが

「……ちよつと待つてね」

「おひ」

そのままバレー用品売り場から出て行った。多分トイレであろう。そのあたりは詮索しないのが当たり前だからな。紳士として当然の当然だ。

「アツコもいないことだし、なんかサプライズで買つか。そのくら いしないと南だつたら怒りそうだしな」

つて何で南が出てくるんだ！別に南のことなんか……ひとなんか……あ あそうだ。思い出した。

昔、南に何故か叩き込まれた『男だつたらこれくらいはしなさい…』 という教えがあつたな。

何でも、親戚のおじさんがモテないらしく、協力しているつむじこの教えに行き着いたらしい。

ただの、女性側の視点じゃないか？と俺が思つてるのは内緒だ。

そういうや練習着がないって言つたなーやはりアシコには、この力ブカの練習着だろー！

これで非力アピールも出来るぞ ウウぐふふ……あつー？でもそうするとアシコがモテモテになつてしまつんじゃないか！？

奴は悪女だから男達は騙されてしまつぞー畜生、どうすれば……

「涼君」

「どうすればいいんだ」

「涼君」

「うふ。そこでパーフェクトな訳だ」

「えいっ」

突然、バチンッ！…という音

「痛～～い！…」

「どうやらアシコにビンタされたみたいだー許せんー」の俺にビンタするなん……

「私の声、聞こえてた？」

「あつああ、聞こえてたぜーアシコの非力アピールの伝授についてだっけ？」

「やつぱり。南君は妄想から現実に帰つてぐのが遅いね」  
まあ否定はしないけどね。アツコには迷惑をかけてしまつたみたいだ。

「じゃあシユーズも買つた所で、今田は帰……」

「やつぱり、保坂先輩に似てる」

「ここに似てねえよ」きじちない笑顔の俺。  
妄想のし過ぎは良くないな。気をつけよう！

「アツコー。今日から俺は

「私は帰るけど、南君はひつあるの？」

俺の宣言スルーかよ ｗｗ

さすがマイペースなアツコー悪女だ。（意味不明）

「じゃあ俺もそろそろ帰るわー。アツコはこれから南の家に行くんだけ？」

「うん。マキも待つてるから」

「せうか。じゃあ途中まで道は同じだからお供をさせて貰おう。」

「了承

「帰り道

「涼君の家は春香の家の近くなの?」

意外にもアツコから話題を振ってきた。帰り道もアツコとの会話を楽しむところ

「歩いて15分くらいかな

「結構、近いんだね。中学は一緒にだったの?」

「同じだよ。南とは中学のときから話したりしてたんだけど、俺が転校したからそれ以来だったな

「だつた?」

「高校は、またこっちに戻ってきたのさー。だから南が同じ高校だつたとはな。サプライーズ!」

「春香から中学の話は聞いてたけど、まさかあの男の子が涼君だったんだ」

「なんだねそれは？」

「うん。春香が中学の時に唯一、仲がよかつた男子が居たみたいなのが」

「まづまづ」

「その男子が転校しちゃって寂しかったって話を聞いたの」

「へえ～俺も寂しかったけど、南も寂しかったのか。

そんだけ南の中で俺は面白い印象を『える事が出来てたってのは光栄だ。

「まあ俺は南と同じ高校に通ってる事実を最近知ったんだけどな」

「春香はバレー部に遊びにきてたけど、涼君は練習に夢中でそんなに見てなかつたもんね」

「まさか？とは思つてたんだけど」

「春香は少し『氣』になつてたみたい」

「それは申し訳ない話だ。話しかけてくれればいいのに」

「やつるのは涼輔からしなきや駄目だよ」

珍しくアシㇼから強氣で言われてしました。

「なつなぜに？（へー？）」

「とにかく涼君から言わなきや駄目だったのー今後、氣をつけてね

なんだか饒舌なアシㇼ。

本当に今日はどうしたのだろうか？俺が南にされ程悪い事をしてしまったのか？

うんー！ そうだなー！ 僕が悪いんやなー！ おそれぐ……

「ああ……氣をつかむよ

「これで春香も……」

「何か言つたかー？」

「ううん。何でもないのー。お気になさりや」

そんな感じで分かれ道に着いた

「じゃあ俺は」」ひだからジャーニー」

「うん。私は春香の家に行くから……またね」

＼ side 凉 ／

「つてか俺買い物に何の役にも立つてなかつたなあ。サプライズも買えなかつたし」

本当にアツコには申し訳ないです。きっと今日の事を南に話すのだろう。

来週が怖いよお怖いよおおおお

俺は肩を震わせながら帰った。途中で近所の子供達が「あいつ震えてね？震えてね？」と黙って凝視してきたので恥ずかしくなつて走つて帰つた。

＼ side アツコ ／

「ジャーニー ジャーニー……」

私は涼君の別れ際の台詞が気になっていた。彼は言葉の後にちょっとしたギャグをのような事を言つ。

「ギャグかは分からぬが、今日のジャーーー」という言葉には、「じゃあね」と「ハツ○ポツチステーションのあのキャラ」が掛かっていると思う。

だから何なんだろう。……そうだ！ツツ「ミミだ！

最近、私はツツ「ミミ」を練習している。理由はおもにマキのボケ対策。涼君は私のツツ「ミミ」を待つてたのかもしれない。

今度から気をつけよつ……ハツ○ポツチかよ！……

そんなツツ「ミミ」の練習をしていた私をみた近所の子供達が「あの人見えない何かが見えてんの？怖くね？怖くね？」と言つて凝視してきたので、恥ずかしくなつて早歩きで春香の家に向かいました。穴があつたら入りたい……とはこの事だと身を持つて実感した瞬間でした。

## 6章 アシㇼの出かけ やの2（後書き）

アシㇼのワクグはたちませんでしたww

アシㇼは何者なんでしょう…僕の書いてこむアシㇼは何かが違つ  
ww

そろそろ夏奈とかメインにしたいね！でも保坂とか藤岡君も出番を  
増やそうと考えています！感想お待ちします！！

## 7章 藤岡は見たー！（前書き）

皆さんお久しぶりです。更新が止まっていたので執筆を止めたのか  
？という意見を頂きましたが、この話を楽しみに待っていて下さる  
方がいる限り、私は執筆をやめませんよ キリッ  
話が雑かもせんが、そのうちに修正をしようと思います。今  
すぐにも皆様に読んでもらいたいので投稿します！

## 7章 藤岡は見た！！

俺は後悔していた。自分が生まれた事ではない。

現在の時刻は午前11時50分。昼飯時である。

何故、俺は自己にいるのか…… わきまで暇潰しに町に繰り出して  
いたというのに

まさかアソコと一緒にスポーツショップに行つて、そのまま帰つて  
きてしまふだなんて……！

「飯にでも誘えよかつたわー。あつでも南の家に行くんだっけな?  
せめてゲーセンくらい寄れば良かつた～。

まあ後悔しても仕方ない……！　昼飯を作らつ……とびつきり美味しい昼  
飯をな……

（南家）

「やつと春香の家に着いた」

ここまで道のりは甘くなかった。特に途中で会つた子供達から凝  
視されたのは恥ずかしかった。

ただでさえ人見知りな私にとっては、『凝視』される程恥ずかしいことは無いのです。

先ほどの出来事を思い出しながら春香の家にお邪魔すると、既にマキはお匂い飯を食べていた。

春香の手作りなんだろ? なあ。

「 もう少アツコ遅いよ〜〜! 先に食べちゃつてるからね〜。」

「 予想通り……」

「 一度いい時間帯じゃない? ほらアツコも座った座った

「 へへへ」

私はマキの隣に座ることにした。もう4月だけ、まだコタツが置いてあるのには安心した。

この時期は若干寒い日もあるので、私としてはコタツの中で丸くなるのが何よりの幸せだから。

以前、春香の家のコタツで丸くなつていると、マキから「 その身長でコタツを使つた非力アピールですと? 悪女だ! 」

と、言いがかりを付けられたので最近はやつていない。マキがトイレにでも行つてゐる隙に丸くなつて。

「 アツコ! むんね〜今! 飯運ぶから」

そう言って春香は手作りオムライスを持ってくれたので、美味しく頂きました。

（一時間後）

「アツ」食べ終わるの遅いってーまさかそれも非力アピール…

「違うよ… そんなに一気に食べられないだけで」

「マキもいいかげんに絡みすぎでしょーマキが早食いなだけよ

「お腹が減つてたからしうがなー…」

「まあマキは置いといて、アツ」は何か買い物しきたの?」

「スルーされた! ? ゆうかアツ」は何してたの?」

「えつそんな一気に聞かれると…」

といふあえず、スポーツショップで買い物をしたことを報告した。

「涼と一緒に買い物してたの! ?」

「涼君と買い物! ?」

一人の話題への食いつきが半端じゃありません。

春香よりもマキの方が食いつくのは何故でしょう? まだお腹が減つてゐるのかな…  
なんぢやつて…ね。

「たまたま出会つたら涼瓶が付けてくれたの」

「へええ。ついにアシㇼも異性に目覚め……」

「なつ何でやねん!」

「このような話題になると若千マキの扱いが面倒なので額にシック！」  
を入れて黙らせてみました。

最近の私は暴力的なのかもしれない。自重しなきゃ。

「くえ～涼君何してたの？」

「なんか放浪してたよ。暇潰しつて言つてたなあ」

「相変わらずの暇人スキル全開ね。昔も今も変わらず……か

「アヒいえばお廻時に帰つてきちゃつたけど、『飯どうしたんだろ  
う』

「涼瓶のひとだからさつと……」

「涼の血脉～

「出来た～！」

目の前にはインスタントラーメン。世間的には「これは料理と言わな  
いらしいが…

つか昨日も作ったし、毎日一食間隔が安定だな。だから、俺の体  
は恐らく大変なことになつているんじゃなかろうか。まあ面倒だし、  
一応茹でたキャベツも献立にじてるから平気…だよな？

「これは栄養が偏つてヤバいことになっちゃうな。逝つてしまつ前に  
皆さんに、今更ですが現状の報告です。

俺は南涼とあります。今をときめく一人暮らしの高校二年生でござ  
れる。口調は安定しません（笑）多分、厨二病です。バー一部に所  
属しています。勉強は頑張つていい方かな。昔、仲の良かつた女子  
に再会したので、これから面白い学生生活を送れるのではないかと  
期待しています。今ここ

「ダメだ。最近独り言多すぎると…一人暮らしつて寂しいからだよ絶  
対」

ラーメンとキャベツを食べながら物々と喋る俺は周りから見れば可  
笑しいけど、現在は家族もいないし好奇の目線に晒されることもな  
いのだ！

「さて、これからどうしたものか」

暇つぶしから帰つてきてしまつたし、飯も済ませた。  
もつ寝るしかないじゃないか…！すぐさまベッドに倒れ込む俺。

「んーおやふみーーーーー」

結局暇を持て余した俺であつた。

（南家）

「…………つてなってるわよ」

「涼君なら有利得るかも」

案の定、マキとアツコの予想は当たっていた。涼は実際に分かりやすい男なのです。

それから数時間談笑を続け、時刻は夕方であった。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

「お邪魔しました」

夕方になつて二人が帰つた後、春香は気づいた。

「夏奈と千秋はいつまで買い物にいっているのかしら？」

それは遡ること約5時間程前。夏奈と千秋がお昼飯を早めに食べ終わつたときのこと。

「そういえば今日は春香の『飯当番』だったよな？ 今日のオカズはなんなんだ？」

「ああそつだつたわ！ 買い物にいかなきや… でも今日はマキとアツコがお昼を食べに来るんだつた…」

お昼を待たせるのも悪いし、かといってスーパーのお昼セールは逃せない。どうするべきか。

ここで氣を利かせたのは千秋であつた。

春香姉様が困っている。お助けしなくては。

私が変わりに貰い物に行くであります

アーティストも悪いし…」

「さうへるわ、夏奈も連れて行きます。春香姉様はね、くらして下さ

「私は家で寝ている！買い物は千秋だけでいいってこい！」

断固として買い物に行かないつもりの夏奈に対し、千秋は魔法の言葉を言うのであつた。

—お菓子を一つ買ってあげるからついて来いバカ野郎！

「おまーながーくぐもー!! 行こーでぐんぞ

単純な夏奈はこれで問題ない。

そう言つと、お菓子用當てに夏奈は家の外にでていつた。

荷物持ち担当にしようあのバカは……」

続いて千秋も行つてきますと家をあとにした。

「少し不安ね。でも千秋がついてるから大丈…夫かな」  
何はともあれ、これでマキ達の予定は守れる。今度の当番は私が変わつてあげなきゃ。

「夕方」

「今日は散々な日になつたもんだよ」

「夏奈がお菓子に気を取られているから卵が買えなかつたんだ。」

今日の献立はオムライスであつたが、何故かどこのスーパーでも卵が売り切れていて、違うスーパーで見つけた最後の一つも夏奈がお菓子コーナーに直行したせいで入手できなかつた。  
何故今日に限つて卵が売り切れなのか。みんな卵を使う日なのか今日は?

なんとも不思議な日であると感じた千秋であった。

「まさか隣町までいくなんてねー」

春香の為、千秋達は隣町まで卵を探しに行つていた。徒歩で探して  
いたことや、夏奈に振り回されたこともあり、普通の買い物に比べ  
て断然長くなつてしまつた。

「早く帰つて春香姉様に卵を届けるんだ

流石に買い物に時間をかけ過ぎてしまった。これでは春香姉様が心配してしまつ。

千秋がすぐさま帰りついた瞬間

「よひーお前!」

ある若い男の姿がそこにはあった。

この時、地元の中学校のジャージを着て、部活の道具を持って帰宅中の少年…藤岡は目撃してしまった。

「南と千秋ちゃんが俺意外の男と楽しそうに会話している…だと?」  
実は南家とちょっとした知り合いである藤岡だが、それ故に不思議であった。あまり南家のことを知っている訳ではないが、南姉妹と親しい交流のある男など、たしか親戚のオジサンだけしか見たことがない。

なので、藤岡はてっきり自分とオジサン意外には異性と交流がないと推測していた。

特に南とあんなに楽しそうに…

「あの男… 一体何者なんだ」

なんともモヤモヤした気持ちの藤岡であった。

## 7章 藤岡は見たー！（後書き）

アツコとのデート？も終わり、ついに藤岡君が登場しました！

それにやつと主人公の紹介できた。○ rn

何度も言いますが、思いつきで書きなぐってます。文で疑問に思つ  
点はどうぞお知らせくださいー！

感想お待ちしますよー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5850m/>

---

みなみけと南君

2011年11月17日17時48分発行